日毎ーデンサ

日一月一年八和昭

それにしても、皇書を、微型することは、武家の力でも、第二へのたから、不十分ながらも、朝廷への問題会は、それが、に、やつでなたのである。 「別十五代の前は、発統実践、会籍を押しつけた ばあってな、、時には、勇能実践、会ををかしていた。 同けず、してゐたことは、ことに認めて、いまる。 もないが、そのころから、《韓の生語は、"歌」し

てしまつた。



### 記象印判 事 五 公



九月中旬に結番が間を公根日として評

歷史的大公判

西村裁判長 こもに、歴史館の大公報です。

がなどではないのです。蘇皮派を 指目正しい軍服でした。和殿、統 派とではないのです。蘇皮派を がなどではないのです。蘇皮派を がなどではないのです。

くてよろしい。正しい心で、至公 至平に载く――それが続物長とし て上乘のものである。

ただ、白紙で是非を決せんと考 識ってるました。

は近に駆けるのが形が、 野蛮県 としているとして、 をしまりを対して、 する 原形 てといるとや 東京 原形 でといるとや 東京 原 、 単原 できるが、 世間が 年 といるとして、 の 年 ( の 本 ) を で が ままり で ままり に ままり で まま 法廷に臨む日の被告が、

判士の棚殿も、法律の知識も僕は思ふーー

0

| 震思想態の公判となると、『起見てゐて感じがいい。これが、

公戦が終つてから

の日、後藤君の令兄後厳隆の 氏は、飲第の事を殺じて、傍飯監 氏は、飲第の事を殺じて、傍飯監

職もなければ法律も知ら、 僕は、いままで鞭士と

西村裁判長 西村裁判長

頭連の連座した疑索事件の 波大助の公報であるとか、 、海山あります。 ・ - まア、そんな風に 職を避ける深縁党なども一切用ひ 「N人自蘇申」ではなかつたので 「N人自蘇申」ではなかつたので 「N人自蘇申」ではなかったので が往近に立つ場合は、和服ときシーメンス事代以来、精校の被

たるものがあります。 一般な関係の対象ります。 一般な関係を対象を関係を 大が関目の午後、自然事を進れ て明治神宮に急邦し、八戦が無事 では、八戦が無事

「大分長いから、砂糖を削してもと、滞留がを定に置いていい」と、滞留を示しますと、体験者に続くうなづいては続くうなづいていいでありから

後藤映範君

りにと祈願したのでし

日本裁判史上空前の大公判が、 日本裁判史上空前の大公判が、 なで開かれてゐます。

8

糖して、いまも! 一五事件の 軍部 被告の公戦を かしたがら、こんどこの五 愛属の赤線に燃にての行為であっても、行動に一片の私心なく、つても、行動に一片の私心なく、 まつてあためです。そのは、 まつてあためです。そのは、 を関する場合は「対応部」であ 「内部の好をつつて、人間を収ぐ であるに「対応部」であ 「内部の好をつつて、人間を収ぐ であるに関係でも行くまつる。といるとは、まととに翻版なく であるに関係でも行くまつる。といるとは、まととに翻版なる。 東京海山市「断層生活会」の、といるとは、まととに翻版なる。

告に限りない遺情と感覚を垂

序制がいたり、いよく公判開廷: 法廷に被告がズラリならんで、 、繊維技にむかつて「起立?」、一般告も、弁護人も、俯瞰人とつて、繊維技具下が出廷する

運動から、皇道日本の精神本義を 連れ、「神々は日々死出の総響か な、夏のためには生きて還らず」

になっ になっ の所は激揚を影するの大戦力で 火のがは激揚を影するの大戦力で 火のがは激揚を影するの大戦力で

と許しを得て、 がて、 酸立不動の表 の表

の姿勢で、堂々と

映した五・一五事件の、いはゆ御承知のように、非常時時局を

汗の法廷

でありまして、陸軍側は東京陸軍側十一名。海軍側十名。

要さが、被告の職上に避れ、割果さが、被告の職上に避れ、割 らのが、全く見られません。 引とか、嘘傷、衒氣——とい 戦、歌作の上に『法廷の神聖』と 『真親家』「跋職」などの言葉に よつて、恣理さるべきものが、戦 いないであるのです。

傍聴してゐて、賈に気持ちのい

、軍隊教織そのまとく、一緒にすつ、被告一同、恰も

りを簡ゆるなど、廿五歳の青年と は見にぬ謝元で、淑塲を修はせた のです。 

、これを思うて、 いと深いものがあ

|振風器と、冷たい水を入れたフラ||変土艦、被告艦の三ヶ所に三台の変土艦、被告艦の三ヶ所に三台の 古賀淸志君

**単へません」と載つてゐました。**中の総形には総きました。弟の
態度が群もいまも、ちつとも魅つ
態度が群もいまも、ちつとも魅つ 海軍側一

## 維新前後の陶庵公 伊藤 痴 遊 第一皿

公頼の生活は、歳らか、梁になつて來た。

その直職者を上は、健社の情が、総はいたである。ということも、関係を、のは、自己の権が、高限等を、総入のしたからもあって、そのよとについては、後に、第十くからりされ、保証は、切い行く、即をつけたもので、思述へないとしば、一定職職であった。 の数王心からでなく、これとても、利用方便の上かの数王心からでなく、これとても、利用方便の上水富を破を忘れなかつたやうであるが、その難は、本富の長につていて、残吉も、同じやうに、星玉への

かりでは、陽内の絨一は、せづかしいと見て、朝然かりでは、陽内の絨一は、せづかしいと見て、朝然かりでは、陽内の絨一は、せづかしいと見て、朝然かりでは、陽内の生态は、景らか \*\*\* く、翻鎖レマ東たのである。 その後、郷田御技が、上売するぞうになつて、朝 述への貢献、帰むマ東たのである。 をくの報酬けがあり、それがために、ひどく高」か をくの報酬けがあり、それがために、ひどく高」か の領域光を、利用する気になつたのが、その本心で、 もつて、それには、明廷へ郷近する、一つの中欧と して、公爵を取込む恋要があるので、公爵に就して は、なかくして、人の難となった。

新されが、全総のお時に、公司の生活も、かな が、実施に関うない。 ののから、選に解り、実体に関することと、女 に載えることが、まなで目がの切り、なってみた。 使とはするうちに、選をの力が、時がとない。 が、対している。まなで目がの切り、なってみた。 の即を、別つけでからは、年を添うで、更家の成 がなっなが、ないない。

なく、他つて、公前の手替え、江戸の郷本に比べた な、地管になり近にくないようでありた。 五端が左そというで、大してものの切り、世間からはほじれじるです。五千石屋のの郷本より、その もはほじればなども、五千石屋のの郷本より、その 生部は、残りてみたのである。

御内帑の苦-

本式の上には、そのに重視解解のものがあて、その解析がは、1と語りでなく、これには、上に かでも、配がるがほうだい、下江に難して、終心 れるという語が、帯のの部でものた。

外に過ぎなかつた。 外に過ぎなかつた。 、髪る ものは、三万石内だから、それらを走引いて

∹

公卿と武家

信長ご西園寺家



そつくり、朝廷の御料

むく、大しに競りない。今日をおって、実力や同むと、大しに競りない。今日をおって、実力を向けて、保事をので、実力をはけって、機りな生活は、その日を処ってもたたち、窓川の天小、長く前いてみる自に、きり上生語が生命のとなる。公園等は、その歌は、いっか別りず、取り続いて、観りを叫してやらう、とった別りません。 いふなへにも、 なつて來たのである。

が、これとても、数配 のであたやうに見いた んであたやうに見いた。如番公を、職 んであたやうに見いた。

公

画

ら、さうであつたらしい。

で、徳川に不平を抱く、武家の力を、利用するやらだところで、何事もなし得ないのであるから、そこだところで、何事もなし得ないのであるから、そこだところで、何の貰力もなき、公願等が、どう騒いけれども、

だけのことで、御鵬皮 の不足に魅しては、一 の不足に魅しては、一 の所に、歩々しい脚帯公 は、してるなかつた。 単語の影響とか、現 なやつつるたが、肝む ややつるたが、肝む

武家の方でも、徳川に對する、不平は、公騎と同 なつて来たのである

は、大分に、違つてゐた。

ベリーの渡來に、

刺激を受けて、攘夷論

んのお印しだけで、

とのつて現れ、明りといて、熊玉龍立たり、さらにしたつて現れ、明りといて、熊玉龍立たり、さらに「転して、戦力に対った。」との時にに、彼らの内には、なったが、いからに対って来たのせある。との時に、たった。 第一年 ののでは、一年 ののでは、 ののでは、一年 ののでは、 の **ノ扶持相立テ候ノミナリ。※ナクシテ、相郷メ候が、丘叉振管スル役ナシ。然レバ宮中相郷メ、家が、丘叉振管スル役ナシ。然レバ宮中相郷メ、家の公・小森ナリトイへドモ、國役ヲ相郷** 



者伊藤痴遊

るから、部野の上さは、紙々にいうてみても、野は、その不市が、何かの修育に、野砂するのは常然の正確であつた。 の正確であつた。 第次のころから、鑑用において、その不平をもら すべき、窓姿気使得もなく、天下上、何年か乱れば

### \* 世界 料 日本

上をうろついてゐる形だが、凝測

にようらついてなる形式が、場所に対するだとに続いて、日本とフィッカとの をロップ、日本とフィッカとの をロップ、日本と「見が確認」に まとロップ、日本とフィッカとの のが、ともかくも同時に対 できたけばならか。 できたけばならか。 できたけばならか。 できたしたがはならか。 できたしたがはない。 できたがはない。 できたがない。 できたがない

根のでは、 でのために中途であると、それらそれ似のが成 ことがあると、それらそれ似のが成 とではなると、それらそれ似のが成 を一質に続くのみならず、紹所検 変の費をなた大型を収示途部し 一部庫上下間をつくで重さるペ からずら日本の間途は、ふたたび が成れると、それらをのからず、

日毎ーデンサ

変形は、パナマがアメリカの生命 級であるといひ、エジプトが英國 の生命級であるといふやうな意味 と異つて、はるかに現態的な意味 と異つて、はるかに現態的な意味

を成立しています。 をおきないであるところをとことをしていません。 であるうか。日本次順のするところをとこにをない。 をとこうをとこにをない、すべて の思いが問題を自復、顕動師 を表示して人を認定するとことをない。すべて の思いが問題を自復、顕動師 を表示して人を記していません。 とは、「日本が始めていません。」 少しようとする別園の攻勢に黙して、日本があくまで 征来通りの反
で、日本があくまで 征来通りの反
際的態度を拝載するとになれば、 遊響のものであり、これに干変調不壊のものであり、これに干

一九○四年から一九○五年にかけて起った日参戦等は、世界更のけて起った日参戦等は、世界更のよいはれて1年ングな事例であるといはれて1年にかける。 國際紛爭

じて接に退かないものと子れば、 単窓に解から可能がたりのとたり になった。 には他であるではどうにもなりのにない。 には他であるではどうにもなりのはない。 に他の第二次が毎回が一次が毎回が し、他に無常の誘導が多つつで低 じてるる機能が開催とうするか。 ロシアはからなったが多のがある。 ことになれば、こん度の認所単数 ことになれば、こん度の認識が単数 の方が、よりは上環域な意味をものではあるまいか。 高 が、ほんらど世界が強めの部型に反して自己の部するともろを行ひ、かれらの認政館に指責はしても、

かれらの影響が転じ相信しても、 あって影響があとしろのない響度を応じたといふことは、不深ら響 のありたに、白色人態の推奨指揮 のありたに、白色人態の推奨指揮 のありたに、白色人態の推奨指揮 の表明を表示してる今上版は近十後 の世界がと照してなる。成となっ を表すってきた事情と、はなければ たるまで。

してコンスタンナノーアルの場別 に生な様の「難っこだるを記録さる に生な様の「難っこだるを記録さる いて行はれた「十三監禁」「悪」の が行けれた「十三監禁」「悪」の 次成の日を記載することがないと はいくない。「増っフィッサイト も、なは世界の影響に任する時代 も、なは世界の影響に任する時代 ローロッパの歴史が、特筆大書

任ある官人が、大つびらにアジア

リカの顔色を飼つた後でなくてはリカの顔色を飼つた後でして、一々英國やアメカに氣彩をして、一々英國やアメカに氣彩をして、一々英國やアメカに氣彩をした。

大な掌架をもつてみるかわからない。 観響事例の(気吹くる本質の意) 戦が如何に宏大無過ぎあり、いか 戦が如何に宏大無過ぎあり、いか に被罪で戦であるかは、時日が経 つに ひれて、だんくく全世界に埋

## 武者振り

からいつて眼を丸く

は、日本と支那としての証券を は、日本と見て、世界の強力を強力としての証券を は、日本と見て、世界の外が認うの という地がありか。近くの日本の を見て、世界の外が認うの として、世界のが必要しての証券が必要の して、これてよりかか。近くの日本の は、日本と支那としての証券が収入 は、日本と支那としての証券が必ずる。

全 岡 松

「到頭アジアの火」打着が火を

タアの火打部、水水を出した部 タアの火打部、水水を出した部 メース・大水は無熱の銀行の上にど には、おもらく何もかかつではを をまい。へたをすると、アメリカと ロシアことに源火をして、それが会 なって、ことに源火をして、それが会

展院になるかも知れないぐらるの 原統にない。 変統にない。 を指数でない、は那様などして、いま までの日本の行動やでものの中に すでに世界がの上におよればす事能 が厳密があるのだ。

数の数を放ってゐるものもすった数の数を放ってゐるものもすった。 要人やフランス人のリストだ。 要人やフランス人のいまだまりを見て、心からいない。 ーロッパのジヤー

識めてゐるといつてよからう。

いづれにしても、日本に輸じて 日本の電大を持ってはない。 日本の電大を持入、日本の配はない。 日本の電大を持入、日本の配はない。 のでは、日本の電大を持入、日本の配かが、たく、 郷がありでもしか・つてを大とと うつて、日本の生命に大会の もないのは、日本の生命に大会の まない。日本の生命に大会の はないのは、日本の生命に大会の になっていたのである。

電者が本稿を綴つてある時には 電子が本稿を綴つてある時には まづ第一に、日本と國際聯盟と

上に振舞へるわけはない。

張子 0 虎

リカとロシアといふことになり、のは関脳健康といふことになり、 のは関脳健康といふことに、アメそのものが空間である上に、アメ だが、関際地壁でのものは、総 に対は如何にも立訳だが、その實 だけは如何にも立訳だが、その實 ら、日本の方で突張り通すことに なれば、総表に配感を発露するも

回認識が無力なすなきことに ついては、関語があり取得を行 といくども、十分にこれを測さし といくば、生は疹の回路が開 といくは、生は疹の回路が開 といくは、生は疹の回路が といくは、生は疹の回路が といくは、生は疹の回路が といくは、生は疹の回路が といくが、生ななかし、 を はできると、それなかと が の人でもとかと が の人でもなった。

## 

### 話実 地 方 版

後は多光づた。ありつたけの 後は多光づた。ありつたけの 高しいしばしの比較がつといた。 二人の間には買い擦練のうちに 続い続いロづけが残されたのだつ

台灣人 迫害された愛人 江維敦君ご千代子さん ゆる

......

内地人と端吹人を耐く、のや うな密熱が無い。それだけでも 日間下らし、電影などはでものでは、そのでは、そのでは、とのでは、ないでは、 知ってるをはいっ人と、世界だ ショックをあたべるに十分だっ たが、その影響に描かれた人態 が終したよるできできる意動に いの様代を1 そうちゃセーショ ナルなものにしてしまつた。

0

態の二人はいま、はなればなれてなった二つの単を1つの心とはなった二つの単を1つの単を1つの心とはなるに対してなる。 静かに続いて近く吹いた蛇の花をがして近く吹いた蛇の花 海を訪けて近く吹いた蛇の花

一石を果徒が旅客

の日――二月五日――これとは全 教男方は認つてあたが、大阪毎日 はさらに一世郷心で車位の全駅を 明らかにし、戦者の駅に「耳に歌唱 くこれを輝へた。そして先月末か ら離りつといた十畝程ぶりといふ めづらしい大雪に閉でされて、殆 ある地方新聞は、松江區等央校 支利三年甲に在原する合用代財 都大林『北天学大林生れの江崎委者 でした、松江市居田町今岡千代子 さんつうの整定意識事代を、こん な見出しでデカイくと稼じた。そ

たもののよう気でしまか。 たもののよう気でしまから は、毎日に響ったに対象る。 がだが、それば単して皮の段 がたして起たっとする。解析的 がとして起たっとする。解析的 がとして起たっとする。解析的 がとしてとなかの女の順等 が受ける。 などとうなかの女の順等 がとしてこれば解析がられて、まじめ で角生とので式ば解析がられて、まじめ で角生とので式ば解析がられて、まじめ で角性となっていばばかがある。 など、はじかしていばばかがある。 など、はじかしていばばかがされていました。 であると、とので式ばばかがされていました。 であると、とので式ばばかがある。 であると、とので式ばばかがされていました。 であると、とので式ばばかができないました。 であると、とので式ばばかができないました。 であると、とので式ばばかがまりました。 であると、とので式ばばかがまりました。 であると、とので式ばばかがまりました。 であると、とので式ばばかがまりました。 であると、とので式ばばかがまりました。 であると、とので式ばばかがまりました。 であると、とので式ばばかがまりました。 であると、とので式ばながまりました。 であると、とので式ばながまりました。 であると、とので式はながまりました。 であると、とので式はながまりました。 であると、とのでする。 であるとのでする。 でする。 るる松立市氏には、摩部な衝動を 物とは最小器い郷郷につながれて 物とは最小器い郷郷につながれて であるながれています。 であるながれています。 であるながれています。

あたへた。

安成県及を深り上相等限度の企

 京の大田の一部では、

 京の大田の一部では、

 京の大田の一部では、

 京の大田の一部では、

 京の大田の一部では、

 京の大田の一部では、

 京の大田の一部であり、男は、

 京の大田の一部であり、男は、

 京の大田の一部である。

 今……

 今……

 今……

 おのおりたいちである。

に若と平代子さんの懸が学出の
たのは、一郎年の夏をまとに振か
ためは、のは、一郎年の夏をまとに振か
ためまるがだった。郷田子宮華
な生活が輝れて来に古書には、戦
で、 を近山内の戦が、下衛屋極
で、 を近山内の戦が、下衛屋極
で、 を近山内の戦が、下衛屋極
で、 を近山内の戦が、下衛屋を
で、 を近山内の戦が、下衛屋を
に上帯が、 なゆの近場。市
八郎田川に位嫁な家を見つけてこ
こへ移りた。千代子さんの家者を

かつたが、それから二ケ月目の夏 を表の今間家に美人の姉妹が でとな、彼はすこしも知らな の五所だつた。

日毎ーデンサ

日本世世二年八年間

I 大

下度は解れまい、解れまいとして作りの「愛珠れるた師」としてもの「愛珠れるた師」としないとを思ったのでつた。いつませる歌れるを観りませることはなっとしてはないのかなの際間の語台の動きをものがよいとして、呼らるできながい。アイスカッノーかの近事を受けた。

本の部に入る町、数は彼のクラス
メートで再展の観知したたる
から引き合はされて、比めて平代する人を知つた。
田君は日本部が現だつたし、それに対域人とし、次東 現だったし、
田君は日本部が現だつたし、
田君は日本部が現だったし、
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現だった。
田君は日本部が現が出るの古君の
歌り、生徒号ものなものもつくる
ないではおかない
開郷・日本の本の。 版家と強寒の色が美しい顔を、さ さんもすぐに は口も きけ ないほ ど、極度の窓像に釣臼となつた。

村

Щ

新太郎

かつたかも知れない。しかし続には人態や関境の 差別はない はずけ、まして疾たちは同じ日本人らやないか。疾のためにあらゆる症格からのがれ、どんな遊客とも関めることを輩つてくれ」 江君はあわてないではをれなか 「僕が打ち明けなかつたのは感

中代する心と打君の突縛が、ままかことまで趣識したのようとは をかことまで趣識してのようとは 関はなかったが、彼女の部はつる そんは、正古化けらすく一気 するののの外出がたく一寒・ たってゆっのたかこうけで、それ となくかのなに離滅なるたべたこともあった。今度深は元地だった。 たので、家は期台に概然だった。

٥

今岡

代

ME D

0

思をよくわきまへてみて那なこと さへなかつたら、つねにやさしい 見さんだつた。 は、亡父の氣性をそのま、受けつは、亡父の氣性をそのま、受けつ

に対様さんはもとより、見さん
も、更らの自分が影響力で
切りの風を観りてみるもしい
で、どんなに置い想響をしてみ
で、どんなに置い想響をしてみ
で、どんなに置い想響をしてみて
で、どんなに置い想響をしてみて
で、どんないとしてもり、ファを
けいけ場響を大してはり、別でを
の影の日本でもだった」というとは
かった。というとは
かった。というとは
かった。というとは
かった。というとは
かった。というというさせ
あった。というというさせ でする人との間には第二数の類が などられば、そは女父の手を置い なりません。新さの歌父で、最初 原子大郎は用名数なりが多数でした。 原子大郎は用名数なりが多数でした。 かり、今時寒を日砂を除すこと。 でありた。小路は今でも たちがボディをきはない。内部 とこちがボディをきはない。内部 とこちがボディをきばない。内部 している経過では、かいるは がしているが経過であるからといって、 とこれがボディをきばない。内部 とこれがボディをきばない。内部 とこれでは、内部 とこれがボディをがあるといって、 とこれがボディをきばない。内部 とこれでは、内部 とこれでは、内部 とこれでは、大郎 でありた。一般など、内部 はている。 でありた。一般など、内部 はている。 でありた。 でからな。 でか

へ 母と兄に曖昧すること

ばれた二人は、ひたむきに総数への道歌を辿りはじめた。 近野の父江文勝氏に千代子さんとの総 版につ いて同 夢を もとめた。 そして千代子さんの一条に約とったして千代子さんの一条に約といる。

野も心も完全に

といってもるやと、「文学研したらの機能など、「文学研したらがは、こうとうでの機能を 同くて出て、つるさんと概念を担じ、これには、これになって見た。 これによっているである。既然を担じ、これになってるである。既然を担じ、これには関係に入る経典を担じ、これには関係に入る経典を担じ、これには関係にはなって、これには関係にはなって、これには関係にはなった。これに関係には、一般のでは、これに対して出るのでは、これに対して出るのでは、これに対して出るのでは、これに対して出るのでは、これに対して出るのでは、これに対しては、これに対しては、これに対しては、これに対しては、これに対しては、これに対しては、これに対しては、これに対しては、これに対している。

をつくろつた。

**\rightarrow** 

変別したことではあつたが、二 りあげてしまつた。行が進山像を 切し思ひなのせた手板は、ひそか に二人の間にしげくと突され 学者、この報歌問題はきつけり から考うに、本社はとよくへい から考うに、本社はとよくへい から考りに、本社はとよくへい から考りに、本社はとよくへい からなりに、本社はとよくない ないとんな単級を用力で一定に にからとすることが感いかつた し、その行気が増れるとだ。様 の関かい弦が優には、白としいま の関かい弦が優には、白としいま の関かい弦が優には、たりの を記した。けから、深とは 無するのはたいかの女を、確もが低級 無するのはたいかの女を、確もが低級 無ずるのは、別さる季音だで、たちら ない響がからのがれたいし ない響がからのがれたい

あけることは出來なかつた。こと

\* 國際聯盟の退却

を対すを示さんもの上音ら位置して るの形だが、かれまり上、ブメント」 上端する情報をおると、短端観響 音楽して「イスティアンメト」 上端する情報をおると、短端観響 音をならて、まり温暖器をは にとだアメリカの(性を多う、を にとなる。現代 があるの形形と三文の作 でもないことを与ってみる。現代 がまたが、ナーな自力を大なと はのを には、カーと自力でよっなと にはる。 には、カーと自力でよっなと にはる。 には、カーと自力でよっなと にはる。 には、カーと自力でよっなと にはる。 には、カーと自力でよっなと にはる。 にはる。 には、カーと自力でよっなと にはる。 にはる。 にはる。 にはる。 には、カーと自力でよっなと になる。 にはる。 にはる。 にはる。 にはないる。 にはないる。 にはないる。 にはないる。 にはないる。 にはないる。 にはないる。 にはないる。 にないる。 にないる。

Ú

28

-635 - C



## 左段生 1/2 の方は

# 女

の危険地様に放し眺しようとする の危険地様に放し眺しようとする。 では青春の血のもゆる、窓いの間 には青春の血のもゆる、窓いの間 には青春の血のもゆる、窓いの間 には青春の血のもゆる、窓いの間 には青春の血のもゆる、窓いの間 には青春の血のもゆる。

り通しの疲労と緊急とにほばんだ り通しの疲労と緊急という でない 何を駆けるともなしに、要々 の可つょきを目述してみる間に、 取くも様田線に着く、もちろん一人の出郷へ入もない。 文學青年をあった私の趣能は、文學青年をあった私の趣能は、 教新舊縣を三世の友人に見違られ 代田遊したのは、明治廿六年短書 のまさ、こと、「大田遊したのは、明治廿六年短書 ルの吹田縣に着いて、 の 登時から 厳告に 戯立つ朝日と - と 歌ひ田せないが、 東海道を各際が 車 に これ で に そ で に そ で の 歌日 と - で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に そ で に を で から 厳告に 戯立つ朝日と - で の 音 時から 厳告に 戯立つ朝日と - で に を で が に から 厳告に 戯立つ朝日と - で に から 変 音 に 敬 に から 厳告に 戯立つ朝日と - で に から から から 変 きんしゅう 8の汽車に乗つたかは今ちよ5しい秋の初めであつた。何

◆獨立の生活戦線

るはことに認めて歌立の生活戦 「東京」のであるが、年は廿一、 「新に立つのであるが、年は廿一、 「新に立つのであるが、年は廿一、 「新に立いると直に その歌目から三井原行とは巻き郷、 重波的の緑性となつで、下世岸の でであるが、年は廿一、 「中国」であるが、 での歌目奏をしながら連載してを

その中上川氏のやうなエライ大賞 家家の「然」によし、たと、、それが 総仕であったにしても、昼夜を出 して、値に偲ばれたことは宇部に名 響であるとはじてるる。 整であるとはじてるな。 私の仕事は、値遇・窓柳数館」

日八月一年八和昭

版する。 とはステキ、またはテキンモ・・・
一覧だけで、それたお音楽だけで
用するが電影響に、 概算事は
「ウェ」となつつるた。 赤音楽ので
「ウェく」と語し合ふのでその 郎氏のお二人がをらる、だけで、 駅ずりのやうに、八州等からバン とピステキ、またはチキンロース 三井富裕長、竪狮珊事中上川彦大鷲田してゆく、その蹴至には郷長 を重従の方へ売出すと中・川氏は 型気になって、栄書で露珠が積む 地と丁雪に加彩せられたが、それ は、鏡形ばかりではない、すべて さらいよ萬に儿報館に訴止せられ るので、謎に裂れ入つた次第であ 大はは、各首からいろくの重要 ・ 一般の数なのである。 ・ 一般の数なのである。 ・ 一般の数なのである。 ・ 一般の数なのである。 が、今で心がれないのは 日入業権告 ・ はい数である。 ・ 日本のである。 ・ 日本の 或時呼給がなるので、源長さ

故中上川邢次郎氏

0

◆三井家の改革

るる間は、三井家改革の最中であるる間は、三井家改革の最中であれてがら、悪々の重大事件をかげながら振繁的に割見してゐたが、 

と であるが、耐性た力ともこの小型 たどの駆せない、サケンとはすみ 見るだけの変調があって、理数値 機能との砂能の心情でをつこ。 は、いさ、" うしたカラクリが必要でもつたの 田にこしら、上げたのでその営時 の三井の財産は、懸くなかれ、さ の三井のすりでは、無いなからに五百万 にその秘密を心得てをつた 、いさゝか會心の哭を禁じ うたった

◆ニキビ文學へ

きで通難して上役からお月玉を食して、雨酔りにはブポンに下駄はして、雨酔りにはブポンに下駄は

提びのために酸器されをるのであるから、どこへ概能を配ぎられるから、どこへ概能を配ぎられるかわからない、楽ひに、結だたりとも損死のお罪元を続いてるなび、概得から、同じ帳鎖するならば、職質は是大阪、看き高や溶漏清の源せは大阪、心持ちの病域、大阪又を持ちない。

してゐることが如何にも不自由 早く一人前に、吳まゝに察して たい、といふよりも、書態のない 検の生活は、辨ひ、謝書景梯に 検の生活は、辨ひ、謝書景梯に たむ枝燦を奉はれてゐるので、 「京を掘れての下衛生活に、ニャ、 「「「「「「「」」、「「」」。「「」

であるが、その言時、三井銀行は 中上川氏の改革初期の時代であつ て、先駆または同館の人々が、入 て、先駆または同館の人々が、入 が毎日々々何十枚が書いてゐるのが毎日々々何十枚が書いてゐるのを、蛇蛇の大意、跡部の附書 上地でWeきたいと考へてをつたの立したい、そして、どこぞ知らぬ上地でWeきたいと考へてをつたの

窓るく水も行通ぶ、人も鬱せぬ北の、傷と契りていつまでも、……」の、傷と契りていつまでも、……」

品行方正で志探解的であるべく 部間やられてみるところの解太君 は、今や三井銀行部取解役とし て財死の電戯であり、測断なる験 士としてその解彙に多の自動を 彩るといへども、その當時の都木 君は正に経域自信の実現す、今で



て耳にした時の 燃してっ 草大に変 機器も夕暮の湖風に、打水を観か 機めける小女の上方言葉を、初め

や、道行の文句にあこがれて、「曾根崎心中」や「心中天網」 ◆大阪最初の失敗

らめざるを得ないのである。それへると、今、慰ひ出しても離を赤へると、今、慰ひ出しても離を赤

艺

とかいふ館人館の二際に同時するとないよ路人館の開発などの、例で、本町橋東福爾人们留ひの、例で、本町橋東福爾人们留ひの、例

なる蛛獣の皮疹さが、如何に、文 を といふ文字と、そのあまりに優 を した時、管根筋といふ文字と、警察 ※ をとつて、種上で来る、申上ことの人力単次、金輪に付た、と 担立台の人力単次、金輪に付た、 もしい鈴の音のぞうなやかましい。 ましい鈴の音のぞうなやかましい。 は、京風の解決地で、極端の音のやうなやかまし、 響きなで、解析である。 は、京風の解決地で、極端色の神 は、京風の解決地で、極端色の神 は、京風の解決地で、極端色の 中地、これぞは同じた女の女 「あっない」と祖夫は、私の練 の実、がここ、相解のみら極端 で、ようめいで縦れると、単 の実、がここ、相解のみら極端

こそ金銭の問題はざらにあれど、 入前の金すらも物珍しい時代に、 たれこを確金ではい。直例の金銭 観報にはでもつでれの学覧、新 観の銀に減でもつたに張ひない。 私は、×××××××する 私は、×××××××する

総定を設したとき、私はどんな に置いたらう、そして博文館の大 形の日語を報の引出しから納み謝 んだ時、風流韻事の終極を用診し てゐる彼の大脈さに、どんなにか 総定を致したらう。

しさうに認めて、程は起き上りながらうら めしさうに認めて、得後左右を跳 みる、深識別を眺がないので、朝 の歌を振うて、そこく 「に微に動 ったことを今、考べると、はづか ◆下宿の同居生活

なぜ 豫期以上の 難工事となつたか 事質は、トンネルが真下を買い

5aaraaaaaaaaaaaaaaaaaaaa

||三本を得る

半、(第二)終海から飛搬総道を選を突き貫いて巡連へ出る線大学を突き貫いて巡連へ出る線大学

登時の鐵道院總裁

10

つては不可能なごとなってもたり のては不可能な選となってもたり のてはて、再想な場合にいた を取じも不明で、再想な場合にいた を取じも不明で、再想な場合にいた をおは、一部にいへば、全く部 無数にあったのである。極速度の速 設にあったのである。極速度の速 対の重視を測定して大いたのの最多 ボーコーロの大脚が振り回じが大正十三 ボーコーロの大脚が振り回じが大正十三 ボーコーロの大脚が振り回じが大正十三 カった。こんなどを縮の水などが 出るととは際にも続ばするが出来る。

である難由に(IO大Oに)は構然 市次山の総密な「壁の一節で、主 をは第二所に対してをり、 をは第二所に対してをり、 地部は大差束から西に即つて観察し、その中に観察が自然場場談。 伊 し、その中に観察が自然場場談。 伊 し、その中に観察が自然のが、 た選集余土が介在し、この部分になどによつてドロく、に變質され の時の噴出ガス、咳は高熱な濃燥り重なりがあり、所々に太古境水

199

十六年の苦鬪の結果

貫通

した丹那ト

0

ンネル

遂に、科學は自然を征服した



理察士一行によって 開口 爆破作業

## は、戦能して整備を進めて行つ 部は、戦能して整備を進めて行つ いた。代謝トンネルが日をとここでで キルの歌生が決定したのである。 キルの歌生が決定したのである。 キルの歌生が決定したのである。 Sellistateがける線四写八分、つて沼津にがける線四写八分、 コンこれに進行した計事! トンネル 弾定 線が 出来 上つトンネル 弾定 線が 出来 上つトンネル 弾定 線が 出来 上つ に その部側 中象線倒音 ら 一 と での部側 中象線倒音 ら 一 と で 下 を の で い ま に か ま

で、測解脈は東海道名物のごまの 脚につきまとはれたり、整樹以上 脚につきまとはれたり、整樹以上

本のといか響きである。 からといか響きである。 からというかというない。 からというない。 からというない。 からというない。 かっというない。 は、 ないらない。 ないらな

改良に―――

場質の不能が示器に傾向して楽 から同時に、工事方法も就良に歌 はが異れられ、おこ十六年間のう たはは解りは、おこ十六年間のう たはは解りました。 に面積明、第万法が探押しれて 証 初の記録とは大き様のことが、その 理が様はよンネト本がの解談 は、下に、推動の表検が(7件) 語で、中、もた人でと断り、これ を応に本売らるとでは、その

日毎ーデンサ

大十三名の線い人根と上側二千 五百万月とをひらのみにし、大止 五百万月とをひらのみにし、大止 上垂江東十大ヶ和音の日上を観 間したこの丁率は、我が関有線面側 担け来の入記法。大概工事であっ 一般こんな、今にして 型くば、日島間付たといひたい線 では、日島間付たといひたい場

大計畫を樹てたか 

海道線の輸送力は結局「日にどれ存金にその咽喉前を擽へられ、東安全にその咽喉前を擽へられ、東

は、整理語が、ケ月間を完全には、整理語が、ケ月間を完全に 尺に一尺づくのだっては、近壁は良 尺に一尺づくのだってゆく。 原工分のし、いっなが形で、一番 原工機能は海域から一世目力・ 戻るもり、海球は世間を担て、 一般ので、単独は生涯が、一番 同工分のは可じたる、いっなるとも なっので、単語域は推理人生で

を一直機につないて人物が料率支援性に大自然へ続んだ共然苦順史十大年の最後の首を自出版く明ちた。うを大力十九日年前一年等、三年親和大学と新世に後継令の進ん上年である熱機即中設定者の主に国を悪国に後継令を一上後に万五十代十十代にも、ららと明めて終しまする熱機線中的定律のでは、正常を高速に後継令のと呼んに関いていませた。 選挙と終す正印微して交通数は増 すに決つてゐる。配介干万と窓押 すに決つてゐる。配介干万と窓押 の関下し一層に、しかも試験似に 透離へ出る線をと考く、世野村歌起 四十三年技能を記載して課堂が設は、後藤總裁を動かし、四十三年技能を記載を動かし、四 スが躓々とし

誰が

開鑿工

事

0)

今から廿四年前、明治四十二年

告書

時のしま女の供述 として調べられた

事件直後、參考人

小僧、松吉の供述

龍太郎の供述

参考人の供述内容

事件の全貌

よね婆さんの供述

・・・に城長里万旗章目



書

支那正月の好物

とれも皆然い、口をやく とれも皆然い、口をやく

34

祖國爱讀

ドを見つめてあるらもに設々布 関が呼び去つて行うた。 かの潜る手をオーダア・スエー かの潜る手をオーダア・スエー がとしてるた人見類の姿はおよそ なとしてるた人見類の姿はおよそ

手はタツター人だ、一人でもか 手はタツター人だ、一人でもか

能がこの日業候を護つてくれる にり、戦しい行気があつたなら たり、戦しい行気があつたなら

ために、この日常旗のために

性と云ふ。米酢で作つたもので、 正月には軽に食ふ。「鰐・や豚の豚」 その他でおいしく魅つけが出来で るの。エンカオは郷に依 のてた窓が入つてゐる。寝ら、

支那人の養生訓

支那s#記月風呈京

順序となるのですが、胃腸の強 て脳内の新り

されるためで精力の炊焼から情内

いらが支那人と日本人との疑。 家が個人に逆蕊をかけやうと、白 気が個人に逆蕊をかけやうと、白 のであれば一向お欄ひなしだ、と のであれば一向お欄ひなしだ、と

精力的な支那人

20

果は熊内殺滅作用です。是は數種に余る築養業の神給でホルモン分

との食物であの借るべきエネル を響がられるが、結局、大部常致の な配だといふ事が最近難きのない

で立訳 で立訳 で立訳 ない。殊さる

にんにくで

耐寒力培養の

奥気を抑除されたにん

隨つて今まで胃に俗流して居た

く選手り窓門、唱風など

唱息の駭を止め駮を切る

オセロの遊戲部はは慢性胃豚のでは、常は、常は、治は、治は、治は、別は、治は性、婦人病のない、治は性、婦人病のない、治は、常生益病、精力のない。

不老强精の源泉

合理

食物は極めて自然的に消化さ

治療法發見さる

【オセロ痔滅膏】

的療法

が終こあるものと云つといっせき。 が表にあるものと云つといっせき。 「夢がしたな有態」「同様用おける事者が利れも、 「日本」と云はれて大震・「歌誓っり相様が明さら間する 「日本」がはれて入意・「歌誓のし相様が明されば明さればれてのます。 「一様での歌門」が歌曲があるが、しい歌書歌にある が私参称に関目さればれてせる。

無いないでは、 「大力らです。 「大力を口が無いない。 「大力と口が無いない。 「大力と口が無いない。 「大力と口が無いない。 「大力と口が無いない。 「大力と口が無いない。 「大力と口が無いない。 「大力と口が無いない。 「大力と口が無いない。」 「大力と口が無いない。 「大力と口が無いない。」 「大力と口があるか。」 「大力と口がある。」 「大力といか。」 「大力といか。 「大力といか。」 「大力といか。 「大力といか

オセロ洋行

オームで今や寒き出さらとする郊ので、大口のはその年の七月八日の歌の首流に大阪郷のブラットフーのようない。 人見嬢のいふ態態の如く閃いた

するのはよしてくれ、年若い女「人見さん、そんな家しい難を



いつの時代いかなる人の際にものである。 相関への豪語に敷むつとけてなるものである、機管にとへ遊遊され は我々日本人は鄙でも無診臓のう たに都関への解説を認むを示し、 もに都関への解説を認むを示し、 において差こそあれ、世上に偲へ において差こそあれ、世上に偲へ 女性の行動に現れたさ

日毎ーデンサ

日二廿月一年八和昭

ドが五片四三、人見郷が五片三三ドが五片四三、人見郷から人見といはれてゐた、歌歌から人見といれてはガン螺のベスト・レコー

鳩山

文部大臣

八見絹枝

自分のレコードからい、代は常原 つべき(用)時、それを順任、相談 のを懸を助づけまいと词く歌づた 人里式の然際がマザくしきのた に遊ひない、久事式の影像、人見 脚はかうほつてゐた。

スエーデンの六十名英國の卅名はかう語つてゐた。

この制那の感慨をかつた。

に参つてお祈りしてゐる、お讀 お前の勝利を一日二度、氏頑様

はど那肚な感激にうたれたので

**\quad** 

カが受きてゐるから確認をかっかが受きてゐるから確認をかっま、第六回は 

一九二二年赤軍の翻載者たるトロカニニ年赤軍の翻載者たるトロリキーは東京記書の郵販兵式場で、その上窓を飛載する外国製造

ペからず」 へからず」 と観明したものであつた。當時 の概念疾力は健かに二十中臓であ の概念疾力は健かに二十中臓であ のに、二八年には古八中臓に 八中臓に、二八年には古八中臓に 増加し三十年には

過去におけ のる模倣時代

が動を求め、コルク解集とドイク のフォンプロンベメク中解とと同 に観光音見があつて、まつ生た出 たものはフゴリニススク解電解行 単校であった、按側を呼ばられー九二三年 でドイクから供解された、これは更生素 九月に開発された、これは更生素 公軍制設に要す る技術的、物質的

タロンスタツドはオランダ駅 オツカー観八十機の飛行線で防御 をかため、潜水艦、電艦を攻撃する水上観をも常響された、菱脈線 れた中央航空水力研究所はN・

飛行機の勢揃ひた色空軍に民間團

主主・自力装飾のもので一ヶ月十 主要に建い温暖に保健の媒作に を有手し院敷用数甲数を乗り、臍 卵用数回砂酸鉄、電路数量、エレ クトロン燃焼 財産管を 備へてる た。

す

## 赤色空軍の自力發展

の外間標、ならびに同様の機であったが二九年間記しれるの様に を実際した観光機でもつって形能と と実際した個光機でもつって形能と と実際した個光機でもつって形能と から、単純の機能が顕著したのでは、はゆるエ から、単純のでは、はゆるエ から、単純のでは、はから、 を表したのでは、はから、 とないである。三〇年はそれ 学……ここでドイッその他受事の形質、概化、從來赤



+ + + + +

空はおろか世界の空とその難で接



請じたもんだ、塲所は官邸だつた ・職器目が、この間の戦に、自分

が、客には正が、とこれが、客には正

か 地名で しょった。

・ 歴報は対象で たいが、大切の膨悪 おかつたが (の) 別がし 深たし 歌ったま (の) 歌から大あわて に かかった (の) 歌から大あわて に しょう (の) から (の) で (の) から (の) で (の) から (の) で (の) で

では、それはロシアの父と「ニウラ」、それはロシアの父と「ニウラ」、それはロシアの父と 「ハルゼンへ行つたことが\* 『ない、どこにもまだ……」 「日本人好き?」 「とんは顔白い?」 た。 を が で が で れは 直削、月の美しい夜であつれは昭和六年八月末、満洲事

つた版女、その殿は恋を通して遊ぶをなた、少し器妙を 帯びた 大き なの臓は剥く遊んで、ご女の歌、その臓は剥く遊んで、ご女の歌、をいまする。

この地で――」 風の方からレコー 風の方からレコー 関の方からレコー 「お、近れる?」 「お、縦れる?」 「おんといふ名削」 「ロシアの名ニウラ、

エらしいカフェのない紫質たる蔵 雷京の 北の鑑り据に、カフェ 雷京の 北の鑑り据に、カフェ

村 孜 いたが何んとなく不安の色 いた要求するやうにもつと私 いた。それは大きな希望に いた。それは大きな希望に

四迷線で奉天へ出たので、彼女とはそれつきり曾ム標質がなかつはそれつきり曾ム標質がなかつはそれつきり曾ム標質がなかつまで、 ところが私が 孝天へ着いたた。ところが私が 孝天へ着いたなってるた。それにはから書いてる 私は彼女に跳れてハルビンへ向い

一般なけるので、
対が対域にいて自分の家へ群かけ続にいてたからは無限を強いて自分の家へ群かってやからは無限を指すれへやってれた様々をつうなは実現群を呼んだ)のやうな淋しいところはいやだ、「モナミ」のマダムを引力してるる、難してくれなけれた場合でできる。なかなかったぎろだ(そしてこんなかったぎろだ(そしてこんなかのたぎろだ(そしてこんなかのたぎろだ(そしてこんないが、

の欠親は行方不明で今は後親と 様が一人あるだけ、版なが日本 行くといふので世親は招氣の からになつてある。で親にもあ んなことをいつてはいけない。 それでなくとも仮女は能観から それでなくとも仮女は他観から

ば日本へ逃げて行わ

**爭討議の國際聯盟において日本帝國は途に殷退と决し、一方熱河大討伐が行はれつ、ある。** 

われらはこのとき、満洲国建國森祥の思

國宣言を中外に發表し、九日には國都是春(新京)において晴れの勍政就任式が行はれた。一年後の今日、滿洲國を中心とする日文粉 昭和七年三月一日滿蒙三千万民衆によつて徐潔された滿洲國が東亞の一角に生誕した。この日東北行政委員長項譽惠氏は光耀ある建

出をしるしてこの意義深き日を強く認識したいと思ふ

にして粉焼し、酸久し の銃火は暴展なる東北政の銃火は暴展なる東北政

たる観察三年万世歌はここに初めたる観察三年万世歌はの様な人工を見かなる天日を明さ見た。 観察の歌立、野島家観察の明びは、 との時感報として現れたのが伊賀 様である。脳裏のやもに調かのでは 様である。脳裏のやもに調かのでは

滿洲國建國宣言後、



新京の

魅惑

日毎ーデンサ 日五月三年八和昭

〇郡

彦

0

赤色空軍を暴露

ケーケーチー

書ミ空軍

極・東・空・の・脅・威

彼と書計年ケ五

歐洲大戦中は殆ど

【合計】 二二四中家 類 球 學 超失區同中家 一〇 類 球 學 超中極學 三 新計 1三 指行趙隊 二二

見てゐる。それはとにかくとして、 事質、ソヴイエト・ロシアの窓軍 は年毎に月毎に標館を増加し内容。 を充質して來た。

日毎ーデンサ 日五月二年八和昭

14

浦

或建贯

Ē

f

増加し三一年には 健上機/器系中隊 健康中隊

五百六十つの試験飛行に出窓コムソールスカヤ・ブラウダ

曜れの都入りをした。野京の職場 には大旦難ぐ皆市在の場が、へんぼ には大旦難ぐ皆市在の場が、へんぼ が、親の大田第七年の 海、への山、新足全市は得安る中 さな機域からである。職々と押寄 ちな機域からである。職々と押寄 くな地域への人、軍域、モニニン グ、シルクハフト、支別機械、モ 晴れの都入りをした。 審別の元首として淑都の獣呼楽に 無関の元首として淑都の獣呼楽に の本語として淑都の獣呼楽に を表演りをした。 の本語として歌歌の戦呼楽に

原係大郎の跳を見て、ニヤリと突然 と、ピュリタンの松田較事長が

別別車はこの大陸能な鍵の音を影けれてながら勘々とフォームにすべ その最後の医療車の膺き立てられた車窓の中、ソファに緩かけた 独改夫婆、一通りの促嚥が終り、 やがて淳健氏は徐彼と觸技との先 「整数いつかや指令、脚は魅力いたし、それに耐水性の通り、脚は 低力のからものただいか。さら だらり、知りてもだらい。 は一つない。 を高でと した、出れの歌響を、いつもの歌歌 と、ニャッ。

らふ。 輝いて夫人

ながら夢露氏に寄りぶつて歩を悪れ、毛皮の節器にうなじをうづめれ、毛皮の節器にうなじをうづめ かに降りた。緑色に真紅の花樹様あたりをはらふ。顔いて夫人が扉

10

0 4 9

立憲民政党本部

れ

6

n

/\_ 民

||民政

らずしも裏面にしたものに非す、 さらば、この郷臓が夏枯れのけぶ この頃、どうしてゐるか、その豚 脱姿繁を覗いて見よう。ホンの覗 いて見るだけのとた。 心細いような

では、 、政策は今原構の下に午野を のであるが、 のいるが、 のいが、 の 一待機の 姿

能致所の極異點となり濟まして整 を掘った民政黨は、今何の狀ぞ、 を掘った民政黨は、今何の狀ぞ、 を掘った民政黨は、今何の狀ぞ、

日毎ーデンサ 日三廿月七年八和昭

機民政

黨

122

膝内閣の延縮をのみ金銭是れ事と

をも工夫し得す、さてこそ徐ろに 機選の來るを待つほか、縦縦なく 機選の來るを待つほか、縦縦なく

2-1

を。彼等の多くは今後政局の軽換なに馬鹿にしたものでないことなに馬鹿にしたものでないこと

▲の策勝を表現するの

民政黨中の二三氏が何等の概ipa 高橋岐相の留任、現際の延命等に

生するとは出来だった。 ・ 中華日本名・フで紹うを示けてのではない、 学問等を動物して した更大順でも、政政研究を動物して にして破壊の年はを解滅なり想め にして破壊の年はを解滅なり想め にして破壊の年はを解滅なり想め にしてはなっていてはするのではな ・ もしたんだよりないたらそれ に、 これなくして活時であ

しきものがあるのは祝して見恋ししきものがあるのは祝して見恋して見恋して

か。復場の多くは今後政尉の帳機 即来るをは決大に、三部の群に 即来るをは決大に、三部の群に 更生の記事からすれば、否是政策 をあるが認からすればかくるもく 要なの類からすればかくるもく を表現に対象を表というや。関 力、電化の関時際がまたとうやの関 まませ、ごさかコーカスしまままり、できたので扱が、次の皮織を借りて 耐え酸、体の変換が、次の皮織を借りて 耐え酸、体の変換が、次の皮織を信りて してみののも単常である。しかし たした状況が、ソークが速度にし て、足皮の一部が、原向時候機関に て、足皮の一部が、原向時候機関に 政局動向によつては閑却出來ない 政黨

嗜眠狀態を打診する

相通ぜんとする陣立てがないとは進徹と群せらるゝ一部と一點認用

歌を忙き、瞬く世界の殿きに斷続といき、中でらせたら、今のと ころ 天下一やらせたら、今のと ころ 天下一やらせたら、中のと ころ 天下一をらせたら、中のところに干力の歌戯についてたちどころに干力

中

行雲流水の

男

岩

男は後往れて取り、 取へられて来 男は後往れて取り、 取へられて来 人名 大部 への心事に成了したる人 人名 大部 への心事になり、 取に顧論 のごときものではない。 度に顧論 のごときものではない。 度に顧論に こって 変は極め出っなき無にない。

て一覧の提伸思議を收め得ず、

して見機にしても、川俣は上 しても、開発にしても、を開注数 い。同日、窓田・側片をよいかり といよ風で、何がにも支柱がなべ を入物が記憶のないのである。 で、門片を織つがなるといるのが で、門片を織つである。現実域によ

総木書三郎氏らの近隣を耐さてる 総本書三郎氏らの近隣を耐むているの の現を立つ、この版 が大きに関連なるのでは、 の見を立つ、この版 が大きにしても、彼はたわまわその伝統を といる。 というに、 の見を立つ、この版 が大きになった。 の見を立つ、この版 が大きになった。 の見を立つ、この版

◆人物なきがゆゑの、やむを得ざい人物なきがゆゑの、やむを得ざると述べば、あまり自設にはならない。

今日においても非常上の電野樹粉 として重きをなしてゐるが、明日 をる人とも思はれず、川崎は碧蝦 鬱癜の代理悟として用常素内に假 野がある。原は町田の意思を代表

人物挑底の一

なや 弘

さらに縦の関係を一覧する現 他人で関コ、井上、江木担側でこ 使して関コ、井上、江木担側でこ の世を当った後の民の繋に両が 歌、人間郷が帰る人は 常敬でる る。以上の存力者にたるべき中心 人物の不足なことにいふまでなん。 ・今日の民政策に上が復身上述。

としてもを、以上のが上でいるが、 があると、現上のが上では同じ間に対している。 (以上のは、1000年) (以上のは、1000年) (以上のは、1000年) (以上のは、1000年) (以上のは、1000年) (以上のは、1000年) (以上のは、1000年) (以上のは、1000年) (以上のは、1000年) (以上の、1000年) (以 てしまったなど、いふいきさつが 日本原が極力反跳した結果、 限内に総方標準に乗り上げられ とともに総方標準に乗り上げられ とともに総方標準に乗り上げられ としていたなど、いふいきさつが

つて行かうとする。 「鳩は君、平和の使ひではないの 八幡さんの飼ひ畑にきまつてるなあに、この場合の場は無論軍

しかつたとでも君はいふのか!」つたらうか」

皮際と耐んだのは、おればかりだ 皮際と耐んだのは、おればかりだ

「(あつい)といつたら五錢とられ

たといふ取さくあるからネ」 したさらだ」 「大阪の断数技等内中解膜下も、 無論ぜら減ではあらうが(また脳 にさんなら一候中臓 いであるのか、なんなら一候中臓 にもと続り加さらか)といつて突は

で、内務大臣から突如殺賣祭止の四月十日、離川京大教授の「秋四月十日、離川京村のさじがね

「なるほど、部歴には神武の杜と、「なるほど、部歴には神武の杜と、

見せしめ

石の島居でも、のぞかしてお い、わけなんだネ」 「さうだ。近く發行される へ 小西總長

ら、罰金をとられるさうちやな「記者クラブや新聞部へ行つ

文相後 任

村が不足して、これ以上語をすす

本英雄氏

「完成官とんな機数があるんだ」「完成官ととんな機数があるんだい。 「なあに、小者博和お京大の郡長 になる負債あずこの郡長を撃打て あたし、それに場出世のあとは、 野道師が機関内隊の夕祖になると

つけた手腕など、水もたまらぬ壁が、その翌日ばつさり大数数を片なったとを 記者 連に 整つためることが出来なくなつた)とい

佐々木惣一氏

し、つていてパンフレクトに、編 ところな人間が良知は、配わます ところな人間が良知は、配わます れた。いき順長をかべ、しかも 「最終の集台」に関するまで、 単生を中心と、単角でとかしこ で、かはされたいくつかの経濟を ここに描いてみる。

「用常なもんだなる」 「用物なもんだなる」 「中郷はわづらって物窓におら 「本郷はしたしてたといよい できばいになけったといよい のか、音楽がしたけったといよい のか、古典がしたけったといよい いった以上におめでたい際だ。

もく据が甚を見上し、 「一體かれはそれに値するほどの

ころちゃないネ」

松井先生

ふ明もあるからさ」

塔の牙象つ立に嵐

官免授教六(C遂題問大京

「(分析体別)といふからおれたもとはまるで縁が違いが、松井先生つて一部どんな人なんだい」「寒点沈波、コッく〜として概門の観光を表現して、まない。

漫畵風に

たれぼこに園學

「人間味豊かで、よくいへば古武「人間味豊かで、よくいへば古武「人間味豊かで、よくいへば古武「人間味豊かで、よくいへば古武

ふ拾をクツピト

三草上山

いはゆる総入りとい ふやつか

**わきせずに誑したらどうだい」** 「いやに冷淡になつたネ。 麹にき 「さる、どうだかネ」

「漫韻にかいたらどうなる

ろく瓢田て空ゆく腕や春のゆめ)と

きで出てゐたぢゃないか、あんなを一致にあつめ、那形な心跡を監を一致にあつめ、那形な心跡を監を一致にあつめ、那形な心跡を監めて東上する日の半日を、終々として職書に置かふけつたといふ記がら、公長の交持

「そこへ」羽の煽が飛んで來て、

宮本英備氏 口繁治氏

で、兵糧攻めにするようと大笑ひで、兵糧攻めにするとうとなでて、君、そんなことをやつたら軍艦でとり離ん

(鮮魔は實験的の最後の数骨が

が取中もあるんです)とやつたさい歌からは、比歌山に立て顧名といい、九月の頭擧がかないが、九月の頭擧 「あの二人ならいひさう

「ところがどうして、卵織づけの「ところがどうして、卵織づけのすることだっ食由を 卵源されることは、いかに落しい か)といふことの見せしめのため だといふのは」 「ワッハッハ」

造次顚沛

「後事を高校代表に一任して東京「後事を高校代表に一任して東京に解省した人君と日君が、こゝでもひとい臓師をおつばじめて、つひに飛ば戦闘をおりばじめて、つかに飛ば戦闘をなる。

籠城持久

「六人の敬虔が、既に敬官となついたか」 「戦闘的領域論といふのを君はき

てるほど」
「なるほど」
「なるほど」 参考のために……」 参考のために……」 「さいてはゐる。語してもよい が、まるでわれ〈一環いものの考 へとはちがふ」 「まあさら影響するな、それをきといふのだ」









鉢火の屋業るゐてつたあて氣元がのたれさ殺まい

# 地災・水災・火災を卷起した

## 北太平洋の大 混亂

三陸地方の地震を打診する

ての慘禍

近來稀有 の大災害

三陸の沿岸は、太平洋の怒調に洗酵削、陸中、陸奥の、いはゆる

十分に持ち出す道がない。しかも 月なき間が、所によっては残念が 類恋になる気はてむた。 などしる水の細で、上手の、 変々しい海水の細で、上手の、 変々しい海水の細で、上手の、 変りが頭、目中よ子、大を収める 変のが頭、目中よ子、大を収める 変のが頭、目中よ子、大を収める ではセドにはおかなかつた。 を見はせずにはおかなかつた。 などの形成の底にから、 方面の底にから、 方面の底にから、 方面の底にから、 方面の底にから、 方面の底にから、 ため、 など、 がは、 など、 など、 のにはおかなかった。 などのであった。 かく、 がは、 のに、 のに のに のに のに の

一方律説は北海道機変弾へも要派に先立つて、東海上大閃光を 要派に先立つて、東海上大閃光を 第一年 - 第二年 - 第三年 - 第三年

三陸地方は大津波の割削地とい 三陸地方は大津波の割削地とい が大戦/でおるやったもの、 が変数/でおを得ないとはいひなが 地数上でおを得ないとはいひなが 地数上でおを得ないとはいひなが がを数/で割り膨な立場にある。

常習地だ

ゆる手質松)の"傍"に打ち

どを起し易いわけである。

水中に呑んだ。 加雲に北太平祥の大遊説である 加雲に北太平祥の大遊説である 近にない――昭和八年は紹なくも の深さであり、さらに進んで百八 の深さであり、さらに進んで百八 の深さであり、さらに進んで百八

たれは舞見に浪津大

お、光葉は暑からぐづついて物学。 その日は極雨時 分で も あつた

四階八六九年)で「五月廿六日上始めて現れたのは貞観十一

三陸地方 大津浪の



## 実話地方 版



## ♦---台北近代 |風景 **◇**─◇

## 李夫 ダンス享樂の夢さめた李延綿氏 家

本社台北支局 輝

総氏夫人び氏風が楽出した。それ総氏夫人び氏風が楽しず家は射より。この材象と作家に指を貼いよう。この対象ともつてきこねてある。その字家の一般が起います。 さいね、ここにお金があしないでおとなしく待つしないでおとなしく待つに不ます弟とけん

日毎ーデンサ

日六十月七年八和昭

して来た夫と四人の撃児とそして 夫の家とを捨て、行方を曝ました 立氏郎夫人と記者は今相郷してゐ るシカを夫人が見論でて案出した。 大大を整縁の駆送さー。

である。 じてある。 じてある。 にした大人の表情に 能としいる一部では完全を得ないは 事態と反称。 を記して表情に多く。 大に到する といる一部では完全を得ないは 事態と反称。 を記して表情にある。 を記して表情に を記してある。 でいる一部では一部である。 に対している。 を記している。 でいる。 でい。 でいる。 でいる。

大の離け歌々に、称一家院のわだ 人の離け歌々に、称一家院のわだ がまりと心の悪い間まりととを驚空 のヴェールでおほひつつもそれを とうしても隠し切れぬといった。 愛児の塚に押し富ててある。 変見の塚に押し富ててある。 この愛す 左端にあつて二男の裕然若の見受けられる。夫人はテープ

在夫人の横に

江氏順夫人は十

ではある。 ではある。 では、そして是那 では、そして是那 では、そして是那 では、そして是那 では、そして是那 では、そして是那 では、そして是那

の沈み方が誤嫌です、主人のことで心配してあるのかとたづね ると注氏腺炎人は「天にいくら 意見をしても聞き容れてくれま せん、ごくなつた子供を入れる と私は五人の子の使親です、主

延続氏本人が日 変中をも推察した、スルと十二

質に家庭の人とさへなつ と四人の子

されやを思ふと万一のことがあってはと十分沿意はしてみたしている。 思かますから要手徴くおいて下思かますからの反省を健すためにこの度はしばらく率の許にないて減つて私いお友達の寒に置いて減つて私いお友達の寒に置いて減つて私

が目星をつけてやつて が日星をつけてやつて が日午後一時頃に李

分離値することの禁ひを立

も円職に行く に行くことと思ひます』となった人もやうやく納をなった今後はお二人のので江夫人もやうやく納

批者で金とタイ を解剖する、李 にある李延穰氏

李大悦子棒



に影響さんと継術長官、そのほか もつて彼がいかに有策院級の簡兄 もつてていかに有策院の高兄

ば總督でんと總務長官、そのほ 合北ではセダンの衆用車とい

サーとドライヴするなどは硼酸的 用車を復自ら探続して意中のダン

常異と楽壁の限をそばだた

## で、私にはどうしたらよいかわで、私にはどうしたらよいかわれない、このなゝでは子供の孵

た。これ間に干郷の徴事である。 作。これ間に干郷の徴事である。 同くれば八日、正デンスとりが高 現金の方所はりの間で同げて大風 が吹き寄せ、我様にシコイ組を有 が吹き寄せ、我様にシコイ組を有 が吹き寄せ、我様によって組を有 が吹き寄せ、我様によって組を有 が吹き寄せ、我様によって組を有 がのなってはなかつた。

Sに常殿に感じ、かなりの大皇の春天西面に向ふ鏡回運動が

タロペトキンがいよく/歌師に 近したのは質にと見の夜からでも つた。かくて三月十日長歌に恋し にが多天入城の背や事に恋者した のである。蘇来に印近に繋びの歌 のである。

大本營より見たる

奉天

 $\hat{o}$ 

かや銃を似にして赤肚の歌先を強な一般を辿かす、職隊長を初め、常星 中を逃かす、職隊長を初め、常星 中を逃かす、職隊長を初め、常星 の 一般を一 中佐の体脈を全軍に布告し、中佐 中佐の体脈を全軍に布告し、中佐 の削進を食ひ止めたのである。戦 **削機を食ひ止めたのである。戦しむるていの骸隊により離く骸た。しかし、この駐熱鬼神を泣** 間もなくであつたが特

月三 戦時 造級規則中、 世しめるのは場動中の保験 するものである。日常観響 するものである。日常観響 のごとき縁動者は全軍側か 人あるのみであつた。 人もるのみであつた。

**化物狂ひの防戦に儲んで目的を密**く命ぜられてゐる第三軍は敵の 

品を数の ロ から遊 がしてしまつ 品を数の ロ から遊 がしてしまつ

7

とを主眼とした

**攻撃した、これが有名なる李官堡** 総計線の第三計圏の部隊を建然に を我第三軍の削離に同け、殊に我 をはの第三計圏の部隊を建然に が、かなりの大兵隊

6

戦策の終記をもたらした奉天開城 あつて、職古の大戦であつた日常 あつれ、職古の大戦であつた日常 私はる

主戦 趣を落断したので、イザ開戦 版なる開戦 融音であり、一様も経 のである、今なら常東級るるに足 らずとの壁い砂心を振き、朝野に のである、今なら常東級るるに足する なる物を配であった。それだけ三 月十日年天育職が現場の大部に脚 月十日年天育職が現場の大部に脚 した時は、本の都範を元職が交空 通り、手の鍵が足の踏むところを 知らず、といったやうな感びやう 変おそくまで詰めて、片幅から電 数を飜談させては、目を通し、非常 数を

し、お名類々と東東市して前戯した。 お名類々と東東市して前戯した。 コラニナスタは東京 一部 一十分なる結果と、不十分の際版とになる。 常しむ。 これたらいであったからであらっ。 常しむ。 これでは、お後に、もっ一部部圏のカカンたらが送りでしているが、できた。 では、現像に、もっ一部部圏のカカンについるが、できた。 できた これ になったい になっ

国語 は福に良けてるは 国本 してるの連絡、もの連絡 が、繁重の割枝など電線に発射を 窓田して単純を投づてるたる原象 ので終りましたとがあるな。 とばく「割さしたとがあるな。 とはく「割さしたとがあるな。 とはく「割さしたとないあるな。 とはく「割さしたとないあるな。 とはく「割さしたとないあるな。 これを歌してるたはどである。 るに観撃してみたはどである。 るに観撃してみたはどである。 ないが中後ますく「向上 程温軍の近がか中後ますく「向上

圖戰會天奉 半連進 中都馬 切り 東 工 株門 台加 

大會戰 健

陸軍中將男爵大島體一氏 **学** 

、機能と、低難に閉されてがたメ毎日の戦化に一喜一

がら神のごとく、単位音に大元郎 として単郷に伸塚艦者をはされた ことは、何を申してよいかから ればど思信なる後継を楽に得な かつた。別語なる後継を楽に得な かつた。別語なる後継を楽に得な かった。別語なる後継を楽に得な かった。別語なる後継を楽に得な かった。別語なる後継を楽に得な かった。別語なる後継を楽に得な

本かに合合して、その無限を継續 を成功したものも表する。 の鑑を加いたものもある。 の鑑を加いたものもある。 の経を加いたものもの種間を確し はて、無数値数がある。 現され、※動脈を担しなっと手 もった人、側板部を担しなっと手 もった人、側板部を担しなっと手 もった人、側板部を担しなっと手 いても、一々の創設課はいかにも、こうけいにもたちられてるた。
用分割を対していまったりにはるたちられてるた。
用分割をの中の関連はおが、その中に更可数
自なが続したが、その中に更可数
自成りの「数と」がも形成けるが
をが続した。その資
されてあるのをが続した。その資
されてあるのをが続した。その資
されてあるのをが続した。その資
されてあるのをが続した。その資

を呼ぎ出され、大阪に進められ、大阪に進められ、大阪に の際、線府御製館によれば開治維新

し、帷幄に巻じてあたのであるが あらせられる明治大帝の顔近に待 あらせられる明治大帝の顔近に待

にされた球面よう。
一般子は早一村道上は今上日一年の里が出来る。
一年の里度出来をの書した時間等
である。ビックの影響をよっての大力に対策が多く人に対策が多く人に対策が多くを表現った。
をした人に対策が多く、機能の
が確認がなられた対策が多く、機能の
が確認がなられた対策が多く、機能の
かられた対策が多く、機能の
かられた対策が多く、機能の
かられた対策がある。

班、兵を脳使する標準 とき大兵廠を指揮する

作用といったやうな、哲理を聴露 したものは「後子」の外にない。 用着欠後は大阪の大元郎である いられたが、一部からのごとく、 度内古つ兵線を繋があるとと、 度内古つ兵線を繋があるとなったのであるないである。なは自衛数 等中、大本線にあつて、路下の長 だいてあるほと、大の版となる自殺 後いてある自己は、との歌と身のうっしとの流い戦がないという。 天子をしたとき、下生が一支機能して強いにと崇厳にして、ないほど崇厳にして、 シ回想しても選を禁じなった

日露 略するを必要なりとし、を聞き「第三軍は速か」 世帯中最も心配し

となした。第三軍司令官とのカイス部のこの否領は慰察に余りある ものがあつたことは 334歳である が、我々大本総僚館の街で展演も が、我々大本総僚館の街で展演も 記だしかつた。しかして第に十二 機能の影響力を終えてき間」を重 がたと、例り有なたる1〇三部後 (創業)がシー目をはく続きした て、しまとした。これに対し、大 本語音風像は、濃彩圧倒が会質 は、月上がまさに対か影響の影響 力を終ってとの か見、抗烈 してはが外なたの観光とつ、大年中 に構身に漂子ることなきを使せず に構身に漂子ることなきを使せず

集馬賽公 線, 軍我和于於三華對局溝渠 線, 軍戰和分於三華對局溝渠 点地戰遇遭河沙

 は、 は 

(女の頁の七般目へつょく)

き、デカンショ配をうたつてかみいるを以ぐよ、さうした相手が出来なくなれば就長をやめるさ」とあるが、デカンショをうたふといふのだけはチト憬しい。

\* 次

は地方の情勢を視察し歩い 動観の馬振鉄一、ひまさ

★號

落語『い 掛合噺『二

が

**(**\*)

<u>6</u>

柳家小 神

田

Щ さ 陽

講談『次郎長裸體道中』

凉

み

台よ

み

ф

0

特

增 月

等 人 界

車

Ó

淑

原

花横 菱山 アエ チン ヤタ

コツ

る。『地方支 敬禪して

でき合せて転談すり 今秋は台灣の支店が 今秋は台灣の支店が りなれた。

では、 では、 のでは、 のでは、

\*

みもの 『世 衆文藝 『字

0 3

秘 小

境 娘 女

Ξ

好

田

表紙 オフセツト彩色刷

定價いつものとほり

が出したので、さすが小匹もけ のとの頃は大社、今まで様車を し過ぎたせゐだとあればこれも 総だが、それにしても大倉社の

り休養をとられる方がよかでは がは、 の安殿すら懸へなかつたほど

この馬塲君と好一點は日清節

まる、一ばい郷ませろ、とい まる、一ばい郷ませろ、とい いどりルで日金融の言語に、さた たった で かった いどりルで日金融の ためい いどりルでは深をしてるうらに、 すつかり様くなりました。 かんさしのヨップを一つた こったま、 あけるのを かれてみるらしい 傾方症の機 チェに、

──なあに、夜になつたから、もう要らないさ。(山 路頁III)

だけでつのに誘導をかける
セと成かったなど大変がたっ
エと関がてあるます。同人中
でも年後者の高風が三さ、
のメガネを傾けて多まっと
のメガネを傾けて多まっと
かが、これは「日屋メガオ
たが、これは「日屋メガオ
たい、これは「日屋メガオ

A大人「八社部に虫はつ A大人「八社部に虫はつ かないセナル」B天人「剛 かせつくつてあるきかい虫 は食はないセセシ」C天人 は食はないセセシ」C天人

ゲムシャな際に剃刀をとあつて日暮になると、

て、ネタタイを締めなほし ます。凝身者の満氏に虫が ついたらしいです。入れ響 に虫がつくしったと満たにして よ。――たとし満たにして が「女は夏に殴るテンだ」す、同人中で物固い望月氏

のだからのなもぞるを贈力英策、 を眺め間手なことをよいもつつば かりを北比近い解実には力戦が 順することいつてあるくらる。代 りる時に称ってきらんことにはい さとい、事者合に立む現れがするか らだ。 ー・1 えるので、いざとなつての認識を見るとで、いざとなつての認識を見るとし、に小動主態がない。 ことかった 動物でないができる マット 切れないのに寄掘的でないができる マット ひんてけしかけられてこれ

たので、これで営分無暇で 財政廿ケ年建理し記書も成業し日電紅長池尾方縁、心境を終い

 $\Diamond$ 

會を突つつき朦朦取引に などは翼つ先に立つて日 などは翼つ先に立つて日 石炭飢饉に最も苦

論

直接間接少からぬ闘能があるの船にしろ山下にしろ石炭資本とは ろが船主協會の親芸株

一人一業主義で日清の粉の中に日清観秋の正田貞一郎老従来

す臨君に界誌雑物讀てし行斷を頁増々又

### 洲 > 0 ものいはぬ巨人』の姿 武藤元 め

6

ことが早く文に添かれた母への何よりの孝行と思ひ、佐賀僧殿に人とりの孝行と思ひ、佐賀僧殿に人を大志を拠いて上京、被樂殿に人き大志を拠いて上京、被樂殿に入き大志を拠いて上京、被樂殿に入 將軍の生れは佐寶縣杵島郡郷 断、無木第一軍の急減として懸き、 日清戦争には少財任官軍々に出征 し、日壽戦争には少佐で正衛間 し、日壽戦争には少佐で正衛間

その緊塞は売して懈忽ではなかをスクくくと伸びて行つたわけといはれたのにも揺らず、刃の

・ 輝く繁國前業の一段 素々たる日 瀬南 國旗・ 素々たる日 瀬南 國旗・

部島 : 言居士だ。この勝さでも戦 郊が終くるのを与りて語い世代を 相手に開発させている使も自分の保護の たりばかりではなく、能長も総戦 も打ちとけて脚手にからだ。こ れば本能ばかりでくく、各地りエ れづつても戦上の 整安 を の

日後け間違といくば、同日後け間違といくば、同日後け間違といくば、同の通明で、外出する時に認好
の元朝で、外出する時に就好
す。氏にいはせると「勉勢
第一鵬」ださうで、先日も
信用の中で貼内の著を贈む

た。美ひごとぢゃないでた。美ひごとぢゃないで

と と。 ――たぶし湖氏に と 見れば、これでこそか り 目れば、これでこそが ださうですが…… (小祭 有量)

女と、二つの島にわけてしまふなと、二つの島にわけてしまふた。 さうすりや、総。いそがし継ぐにきまつてるぜ」「何つて、勿論、交通するため

世 田 (田)

# = B £

廿一日(金)

週間時事

賣發日近 遵介 1 7 m 

映上マネキ興新

記



【選入等一】 作也幹本宮

シネ 身賣りで討つたが 7 が 殺す 久 \*\*米 直木三十五

傑 唯

物 0 生 北村小 田 時彦 \*松

夕 話 岡

名物・カラー・セクション

落モ ダ 語ン 流 勝太郎でひと、 7 ニュウ・ステップ 7 か戻ろ 不 思 き 長谷川 門脇陽 サトウ・ハチロ 修

新作似顔まんが集ナンバ・ワン・ゴシップ集 同人連作コン

後

接會長と戀中

武藤元 師

逝 去 せ る